主日礼拝
２０２３年１０月２２日（日）
題　「『ムナ』」のたとえ」
テキスト：ルカによる福音書１９章１１～２７節

皆さま、おはようございます。
先週は洲本教会創立１２０周年礼拝を共にお捧げし、主の憐みと導き、
歴代牧師や多くの信徒との方々を覚えることができましたことを心より感謝いたします。
さて、今日の聖書個所は、イエスの語られたたとえ話で「「ムナ」のたとえ」となっています。この個所は難しい個所の一つだと思いますが、教会歴で示されている個所でもあり学びたいと願っています。

このたとえ話は、いよいよ主イエスが神の都と呼ばれたエルサレムの町の向かわれる前に弟子たちを始め、イエスについて来てそばにいた人々に語られた話です。「 11:人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。」
イエスは人々にどうしても語っておかなければならないと思って話されたのだと思います。弟子たちやイエスについて来た人々の中には、「神の国」は
今すぐにでも地上に実現すると期待していた人たちがいたのです。天と地を創造されたお創りになった神が、ご自身の力をもって、この人間の悪と罪により乱れた世界を良い世界へと造りなおされる、その時が来るということです。
終わりの時とか終末とか、救いの完成の時とか言われます。旧約聖書を読むと、愛なる神さまは、宇宙を創造し、人間を始め被造物を造られました。そして、それを維持し、保たれて今日まで来たのです。そして、いつか、わたしたち人間がその時を決めることはできませんが、世界を完成させられる時が来るのです。それは神の思いと意思を伝えている旧約時代の預言者たちが伝えていることです。神の子イエスも言葉を行いでそのことを教えてくださったのです。
しかし、神の国は人間が数えられるような形で、また計算できるような、人間の自分勝手な願いや思いで来るのではない。神さまの力によって到来するのです。それまで、人間は待ちつつ急ぎつつ、良き働きを成して行くことが大切なのです。神の国とは、神の力のことであり、その力がこの地上にあますことなく表れ実現することを表していると言って良いと思われます。

今日の聖書のイエスのたとえ話は、間違った神の国、そして終末待望を正すという目的があったのだと言われています。

たとえ話からイエスの思いを聞き取りたいと願います。
12:イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰る
ために、遠い国へ旅立つことになった。
13:そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰っ
て来るまで、これで商売をしなさい』と言った。
ここに出てくる「ムナ」とは、お金の単位です。以前の聖書の訳では「ミナ」となっていました。聖書の終わりの部分に「度量衡および通貨」の表がありますので、それで見ると、
ムナは、２０００年前当時のギリシアの通貨のことで銀でできており、１ムナは、１００ドラクメにあたり、当時ユダヤを支配していたローマ帝国の銀貨では、１ムナは１００デナリオンに相当します。
１デナリオンは当時のローマ兵のおよそ１日分の賃金にあたりますので、
１ムナは１００日分の賃金になります。一日５千円として、５０万です。
王の位を受けるために旅に出た人は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡したのです。十ムナは千日分の賃金に当たり、一日５千円として、５００万です。
相当の金額になります。王の位を受けるために旅にで出た人は、自分がいない間に、十人の僕に商売をさせたのです。

14:しかし、国民は彼を憎んでいたので、後から使者を送り、『我々は
この人を王にいただきたくない』と言わせた。
王になる予定の人を、国民は憎んでいた、「憎んでいた、」とは、あまり好きではなかったと受け取って良いと思います。そこで彼らは、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせたのです。
このことは、ユダヤの歴史に現実にあったことを踏まえていると言われます。
イエスが生まれた時のユダヤの王はヘロデ大王ですが、ヘロデ大王の息子のアルケラオという名の人物がヘロデ大王の死後、ユダヤ、サマリア、イドマヤ地方の領主になるのですが、そのことに反対したユダヤ人たち、当時のユダヤの支配者であったローマ皇帝に使者を送って反対させたという歴史的事実が影響を与えていると多くの聖書研究者たちは理解しています。
たとえ話によれば、時が経って、
旅に出た者が、王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕たちを呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知ろうとした。(15 節）のです。

商売・お金を預かった者たちの働きの結果報告が始まったのです。
16:最初の者が進み出て、『御主人様、あなたの一ムナで十ムナもうけました』と言った。
17:主人は言った。『良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。』
最初の者は、王になる人から預かったお金を用いて、１０倍に増やしたのです。主人は彼の働きを褒めてねぎらい、十の町を支配する支配権を与えました。
次に、
18:二番目の者が来て、『御主人様、あなたの一ムナで五ムナ稼ぎました』と言った。19:主人は、『お前は五つの町を治めよ』と言った。
五ムナ稼いだ人には、五つの町を治めさせます。

さて、もう一人、
20:また、ほかの者が来て言った。『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。』
彼は主人から預かっておいた１ムナのお金を、使わずに布にしまっておいたのです。ここで布とは、当時、布を頭にまく習慣があったようで、ターバンのような布かもしれません。彼がお金を使わずに頭に巻く布の中に入れておいたのです。彼にとっては主人は厳しい人だったので、預かった資本を失わない安全な方法をとったのです。彼にとっては、主人はただただ怖い恐ろしい人だったのです。
ですから 21 節で「あなたは預けないものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。」と主人に言ったのです。
そして彼は自分の語った言葉で、主人の裁きをうけることになったのです。
22:主人は言った。『悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。わたしが預けなかったものも取り立て、蒔かなかったものも刈り取る厳しい人間だと知っていたのか。
23:ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。』
24:そして、そばに立っていた人々に言った。『その一ムナをこの男から取り上げて、十ムナ持っている者に与えよ。』
確かに主人は厳しい面はありましたが、働きの応じて正当な報いを与える人であり、気前のよい振舞いをする人でもあったのです。
25:僕たちが、『御主人様、あの人は既に十ムナ持っています』と言うと、

26:主人は言った。『言っておくが、だれでも持っている人は、更に与
えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げら
れる。

このイエスのたとえ話を、弟子たちや、そこにいた人々はどう聞いたのでしょうか。今日この場で聞いた私たちは、どう聞くでしょうか、どのように理解するでしょうか。おそらく一人ひとり異なっていると思います。
この世を人間の悪や罪から神が救われる終末の日はいつかは来るけれども、
人間が自分勝手にその日を想定するのではなく、与えられた人生の日々を大切にして愛なる神さまに喜ばれる人生を生きて行くことを教えてくれている、
たとえ話だとわたしは思うのです。
27:ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここ
に引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ。』」
確かに主人は厳しい人ですが、イエスは示してくださった神は、正義でありかつ憐み深い方です。

最後に、王になった主人とは、誰でしょうか。それはイエス・キリストではないでしょうか。人間の罪からの救いのために、自ら罪の裁きの十字架の死を負い、それゆえ、神から復活の命を授けられた方、また神と等しい主とされた方であるイエス・キリストです。わたしたちは、働きに対して「良くやった！」と受け止めてくださる憐み深い神さま、苦しむ者の友であるイエスさまを覚えて、与えられた人生を日々大切にして生きて行きたいと願います。